

## 紙つて

科学は真理追究の営みだ。

後期印象派の画家ポール・ゴーギャンに「我々は何処から来たのか、我々は何者か、我々は何処へ行くのか」と題する名画がある。かつてはこの難問に宗教や哲学が対応してきた。一方、科学は我々を取り巻く自然環境や社会環境を実証で明らかにし、客観的に答えよとする。

科学者は謙虚でなくてはならない。哲人ソクラテスは「無知の知」、つまり自分たちが無知であることを知らねばならないと諭した。その上で何を知り、何を知らないかを区別すべきだ。新たな「知」を獲得すれば「未知」の世界は相対的に拡張する。歴史的な大発見は常に未踏の広大な科学分野を開き続けてきた。無限に広がる自然界を

## 治良の野依

## 科学者の使命

知り尽くすことは永遠にあり得ない。

ではなぜ、到底不可能に挑むのか。創造的な発見の積み重ねこそが、森羅万象を神話ではなく現実のものとするからだ。原因あつての結果。数学原理と科学法則に例外はない。しかし、確率、カオス、ゆらぎなどがある。もたらす不確かさがあり、我々の行方は定まらない。

百三十七億年にのぼる宇宙の歴史、物質の成り立ちを探る素粒子論は、人類が決して主役ではないことを教えてくれる。生物進化論はすべての生き物のつながりを思い知らせ、地球上の物質変化と循環は「万物流転」「輪廻転生」を説明する。現代では併せて、新技術開発を通じた社会的価値の創出と人類存続への貢献が求められている。次世代の科学者たちは自らの使命を認識すべきだ。

(理化学研究所理事長)